http://www.gakurin.co.jp

NO. 172 共創ネットワーク

学林舎情報

●発行日：2016年11月19日（土）

〒661-0035　兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3　TEL 06-4962-5876　FAX 06-4962-5877　e-mail　info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎

GAKURINSHA TOPICS

入試の行き先－2017年度の入試傾向
2017年度の中・高校、大学入試の傾向を、過去3年を振り返って分析、解説

文部科学省は、大学入試制度の大幅な改革などを柱とした「高大接続改革実行プラン」を策定しました。この改革の中心となるのが「思考力・判断力・表現力」の重視です。このような改革が行われる背景には、国際化やグローバリゼーション、ICT の進展による変化があり、これらに対応していく力をつけさせるために、これまでの１点刻みの得点争いから、思考力や判断力を重視する試験形式への転換が実施されています。これらを踏まえて、2017 年度の入試傾向を、過去３年を振り返って分析、解説していきます。

■大学入試（センター試験）の傾向

2016 年度より全教科が新課程対応となりました。科目別にみると、英語ではリスニング問題において、従来の長文内容を聞き取る形式から、３人の会話を聞く形式となり、思考力と判断力が求められる内容でした。長文問題においては、総語数が若干減りましたが、実践的なコミュニケーション能力、論理的に読み解く能力を問う新課程に沿った傾向となり、2017 年度もこれが踏襲されると予想されます。国語では、身近なテーマを題材にした評論文、小説、古文・漢文からの出題で、出題形式も大きな変化はありませんでした。今年度は例年に比べ問題が易しくなったことから、来年度は多少難易度が上がると予想されます。数学では、数学Ⅰ・Aの必修問題が３題から２題に変更されました。来年度も、基礎的な問題から思考力を問う問題まで幅広く出題されると予想されます。社会では日本史において、例年出題されていた第１問の会話文形式の問題が学生の日記形式に変わりました。理科では、地学基礎において計算問題の減少が見られましたが、全体的に大きな変更はありませんでした。社会と理科は暗記のみではなく、資料を正確に読み取る力が必要になると予想されます。

■高校入試の傾向

英語では、自分の考えや体験などを英語で書く問題が出題されており、英語で表現する力が求められています。国語では、論説文、小説、古文・漢文などから構成されており、従来と大きな変更はありませんでしたが、記述問題が増加傾向にあります。数学では、従来の問題に加えて、おもに資料の活用などの問題が増加傾向にあります。社会では、地理・歴史・公民の３分野からまんべんなく出題され続けています。傾向としては、資料の読み取り問題や記述問題などが増えており、知識の暗記だけでは解くことが難しい内容になっています。理科では、実験や観察の観点からの出題が増えており、科学的根拠に基づいて説明する能力が求められています。2017 年度も全体的に、「思考力・判断力・表現力」を問う問題の増加が予想されます。

■中学入試の傾向

全教科で、適性検査型の問題が増加傾向にあります。国語では、物語文・論説文の読解問題が基本となります。記述問題はほとんどの学校で出題されていることから、字数制限内でまとめる表現力が求められます。算数では例年通り、基礎的な知識や計算力を問う問題から、処理能力や思考力を問う問題まで幅広く出題されています。社会では、歴史・地理・公民が幅広く出題されます。知識の暗記のみでなく、資料問題や記述問題に対応できる力が求められます。理科では、物理・化学・生物・地学が幅広く出題されます。地震や台風などに関する時事問題の比率が増加していることから、2017 年度も理科という枠にとどまらず、他教科との横断型の問題が増えると予想されます。

（文／学林舎編集部）

学習教育の行き先
通信制教育の行く先

2016 年 4 月 1 日に、学校法人角川ドワンゴ学園が通信制の高校である「N 高等学校」を開校しました。しばしばメディアでも取り上げられ、話題となっています。

＜N 高等学校とは＞

全日制・定時制と並ぶ通信制の教育課程を持つ高校です。生徒は、おのおのスマートフォンやパソコンなどを利用し、勉強したいときにインターネット上で動画を再生して授業を受けます。生徒一人ひとりが自分のペースで学習し、高校卒業資格を取得することができます。

おもな特徴には以下が挙げられます。

①高校卒業に必要な単位の取得以外に、大学進学を目的とした有名予備校講師による授業を受講することができる。

②角川が提携しているドワンゴ（ニコニコ動画を配信している会社）のプログラマーから、プログラミングを専門的に学ぶことができたり、小説、コミック、イラストなどのエンタテインメントについて学んだりすることもできる。

③様々な地域で職業体験をすることができる。

このように N 高等学校では、インターネットを使った高レベルの授業を受けることができることに加え、大学進学や、将来の職業を見据えた学習を、自分のペースで進めることができます。そのため、②のような自分が興味を持っている専門分野を学ぶために、N 高等学校進学を選ぶ生徒もいます。

＜日本での通信制教育の現状＞

一昔前までは、義務教育を終えると同時に就職する人も少なくありませんでした。しかし、現代では、せめて高校は卒業しておかなければ、就職などの面で不自由になるという考えが大半となっています。

けれども、様々な事情により、高校に通うことが困難な子どもたちもいます。たとえば、小学校や中学校時代に、いじめや、学校になじめないなどの理由で不登校になり、高校進学をためらったり諦めてしまったりするケースです。また、進学校に進学したものの、異常なほどの競争を強いられたり、人と比べられ卑下されることに耐えられなくなったりして、人間不信に陥ってしまう子どもたちもいるようです。

このように、一度学校という集団社会に自分を置くことが怖くなってしまった子どもたちにとって、自分のペースで学べて、必要以上に他人と関わることを強制されない通信制教育は、非常に価値があるものであるといえます。

＜アメリカの通信制教育の状況＞

アメリカの通信制教育の制度が日本の制度と大きく異なるところは、日本で義務化されている「スクーリング」が一切ないところです。

また、アメリカで通信制教育を選択する場合は、「学校に通えないから」という理由よりも、「より良い教育を求めていたり」、学校へ通わずに家庭で学習を行

う「ホームスクーリング」を望んでいたりすることが多いようです。ホームスクールで学ぶ子どもたちは、コミュニティー活動や青年活動などに積極的に取り組んでいることが多く、また、家庭の収入差や親の学歴に関わらず、学力テストのスコアが高いという結果が出ています。

このようなことから、アメリカでは、日本とは異なる理由で通信制の教育が注目を集めているようです。

＜日本で拡大するのか？！通信制教育＞

日本とアメリカでは通信制の学校を選ぶ理由が異なっています。また、日本では、アメリカのようなホームスクーリングはあまり知られていません。アメリカは義務教育の段階から、全ての州で法的にホームスクーリングが認められているので、学校に通わず、家庭で学習することに違和感を持つ人が少ないと思われますが、日本では義務教育課程でのホームスクーリングは認められていないため、家庭での学習はまだ浸透していないのが現状です。

日本でN高等学校のような通信制の学校が拡大していくかどうかは、アメリカでホームスクーリングが選ばれる理由と同様に「より良い教育」を求めるかどうかなのかもしれません。N高等学校の特徴がもっと知られるようになり、学び方や学ぶ内容が多様になれば、今後、日本でも通信制の学校にさらに注目が集まるのではないでしょうか。

（文／学林舎編集部）

学習教育の行き先
求められる自己評価

文部科学省では、「自己評価は、自ら学ぶ意欲などを見る上で有効であるばかりでなく、児童生徒が自分自身を評価する力や他人からの評価を受け止める力を身に付け、自己の能力や適性などを自分で確認し、将来を探求できるようにするためにも大切である。」と示しています。近年、このような自己を評価する能力が、児童生徒に求められています。

■自己評価とは

自己評価とは、児童生徒が、自分自身で自分の学力、性格、態度、行動等を客観的に評価し、それをもとに、自分の今後の学習や行動を改善していくという一連の活動です。

■自己評価能力を高めるためには

自己評価能力とは、児童生徒が、学習を通して自分自身の能力を認め、その能力を高めるために、自分自身で学習し、考えていく能力です。

自己評価能力には、自分の学習状況を理解する、自分の学習成果について反省する、反省をもとに解決策を考える、といういくつかの段階があり、自己評価能力を高めるためには、次のようなポイントが必要だと考えられます。

①自分の学習に対する目標を設定する。

学習に対する見通しを持つために、より具体的な内容の目標を立てることが大切です。具体的に目標を設定することによって、自己の学習の過程や内容を明確にすることができます。目標を設定することは、自己評価能力を高めるための重要な第一歩になります。

②自己評価の基準をつくる。

自己の目標の達成状況を知るために、指標となる基準をつくります。自己評価では、何をどう振り返るかがとても重要になります。

③基準にそって、設定した目標の達成状況を評価する。

基準にそって評価することで、何ができていて、何ができていないのかを明確にすることができ、自己評価能力を高めることにつながります。

④他者からの評価と組み合わせて、客観的に自己を評価する。

自己評価は、自分で自分を評価するものですが、児童生徒の判断は、甘すぎたり厳しすぎたりし、同じ基準を用いて評価しても差異が生じることがあります。そこで、他者の視点での評価をとり入れ、自己評価と組み合わせることによって、より正確な客観的自己評価ができるようになると考えられます。

⑤自分の学習の不十分なところを改善するための方法を考える。

自己評価によって分かった、学習の不十分なところをどのように改善していけばよいか、その方法を考えます。

⑥自分の学習成果をよりのばすための方法を考える。

学習の不十分なところだけでなく、目標が達成できた内容についても、さらにそれをのばしていくことが大切になります。そのための方法を考えます。

自己評価能力を高めるためには、上記のようなポイントをもとに、教師が児童生徒への指導を工夫していくことが重要であると考えられます。

（文／学林舎編集部）

学林舎の行き先
思考の時間を増やしたい

ＧＴシリーズ国語　読解力特化が 12 月上旬発刊されます。読解力特化を制作した理由は**要約・表現力の育成**です。この教材の特徴は、大きく２つあります。

（１）長文を 3 分割して読解問題を学習、**最後に長文をもう一度読ませ、要約・表現力を問う問題**を学習。

（２）物語文（1－3 回 16P）は「博士の愛した数式（小川洋子著）」、説明文（4－6 回 16P）は「国語は好きですか（外山滋比古著）」の 2 種類の文章から構成されています。**問題のための文章ではなく、文章を理解するための問題と位置づけて**います。そのため、学習者には学習前、学習後でもいいので、全文を読んでもらいたいと考えています。

この教材の対象者は中学生と考えていますが、高校生で読解、表現力の基礎を強化したい生徒にも使えます。小学生であっても、ＧＴシリーズ国語 5-4 級を学習できる力があれば、辞書片手に学習することが可能です。

学林舎はこの 3 年間ＧＴシリーズ国語に関して、3 種類の教材**「要約力特化」「文法力特化」「読解力特化」**を発刊してきました。この3種類の教材発刊に関して、**子どもたちに「思考する時間」を与えたいという想い**が根幹にあります。先日もある塾の先生のお話を聞き、あらためて、子どもたちの多くが時間に支配され、ゆっくり考える時間が生活においても、学習においてもないということを実感しました。

これは大人においても同じことかもしれません。デジタル化やＳＮＳ（Social Networking Service）の発達により時間は細分化され、分刻みで何かをしている時間が多くなりました。そのことにより、一人で考える、思考する時間は極端に少なくなり、人によっては、まったく失ってしまった場合も少なくありません。一人で思考する時間を失ったことによって、多くの表現する力を失ったと私は考えています。**表現する力を養っていくには、言葉の深化が必要**です。切り取られた情報を過剰に摂取して、知識量が増え、説明することは多様になったかもしれませんが、表現する力、自分の思考から生まれる言葉を育てることは難しいです。**表現する力を育てて行くには、自分自身に問いかける思考の時間が必要**です。

成長段階の子どもには様々な学習、体験の経験化は必要です。そのためのトレーニング学習は必要不可欠です。問題なのは、バランスや距離感です。偏りすぎた学習は、学習者を固めます。一回、固まったものをほぐすには時間と労力が必要です。目の前の目的や目標を設定し超えていくことは、日々の学習には必要です。しかし、漠然とした目の前の目的や目標を設定し超えていくだけでは、自分が求める頂には到達することは難しいです。目的や目標に対しての自分の位置、距離感を意識する必要があります。バランスや距離感を保つためには思考する時間が必要です。

学林舎は子どもたちの思考する時間、思考することの大切さを「成長する思考力ＧＴシリーズ」を通して、伝えることができればと願っています。

（文／学林舎　北岡）

クロスロード Crossroad

第63回　文／吉田 良治

世界大学ランキング

今年も9月にイギリス・タイムズ紙が、世界大学ランキングを発表しました。トップ10の顔触れはほぼ毎年同じ大学ですが、今年は5年間トップを維持してきたアメリカのカリフォルニア工科大学に代わり、イギリスのオックスフォード大学が1位に輝きました。一昨年までは400位までの発表、昨年は800位までの発表と拡大し、今年は980位までランキングの幅が広がりました。ランキング入りしている大学数を国別でみると、トップはアメリカで148大学、2位はイギリスで91大学、日本も69大学の大学がランクインしていますが、その多くは昨年からランキング発表の枠の増えた401番以降、特に601番以降に集中しております。

3年前に安倍首相が『世界大学ランキングトップ100に、日本の10大学を入れる！』と宣言し、大学の国際競争力強化として、スーパーグローバル大学等事業を立ち上げました。大学の教育や研究などの分野は、すぐに大きな成果が期待できるものではありません。ただ、年々世界的な大学評価で、日本の大学の下落が顕著となっています。今年のタイムズのランキングでは、東京大学が昨年の43位から39位に順位を回復したものの、アジア各国の急激な追い上げに、昨年アジア3位だったのが、今年はアジアで4位となりました。日本の大学で第2位の京都大学は昨年の88位から91位へと下がり、50番内を目指していた数年前から大きく順位を下げ、100位以内も危ない状況となりました。2年前までは101～200位に位置していた東京工業大学、大阪大学、東北大学は201位以降へとランキングを落とし、安倍首相の思い通りとはいかない状況です。

ランキング内に最も多くの大学を送り込んだアメリカでは、スタンフォード大学、ハーバード大学、カリフォルニア工科大学、マサチューセッツ工科大学といった、上位大学には私立大学で占められています。もちろんカリフォルニア大学のような州立大学でも、トップ10位以内に入っていることから、アメリカの大学は私立、公立ともに国際的な大学力の高さを示しています。ところが日本の場合、ランキング300以内はすべて国立大学で、今年351-400位にランクインした豊田工業大学以外、旧ランキング（400位以内）に日本の私立大学は見当たりません。数年前までは400位以内に慶応義塾大学や早稲田大学の名前がありましたが、現在はどちらの大学も601-800位と低迷しています。昨年800位まで発表が拡大されるまでは、関西の大学の名前をタイムズ紙の世界大学ランキングで見つけることはありませんでしたが、昨年の発表枠拡大で近畿大学が唯一601-800位にランクインしました。今年の801-980位までの発表で、それ以外の関西や関東の私立大学の名前も、数多く見受けられるようになりました。しかし真の国際競争力をつけていく上では200位以内、さらには安倍首相の掲げるトップ100位以内を目指すことが重要といえます。そのためにはスーパーグローバル大学等事業などの活用で、国公立大学だけでなく、より多くの私立大学が大学力と大学の国際競争力を高めていく必要があります。

日本は少子化で大学進学世代が減少し、大学数が過剰との考えもありますが、世界の大学のスタンダードは留学生の獲得です。世界規模で今後も人口は増加し続けます。日本の少子化問題と大学数の関係は、世界的な動きの中では全くの論外といえます。そして進学先を選択するうえで、大学ランキングとその評価内容は、留学先選定で大きな判断基準となります。下位に低迷している、もしくはランキングに入れない大学こそ、大学存続の危機意識を持つべきでしょう。（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
http://ameblo.jp/outside-the-box/